

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19520032

研究課題名 (和文) 言語と身体に関する認知現象学的研究

研究課題名 (英文) On language and embodiment -from a viewpoint of cognitive phenomenology

研究代表者

長滝 祥司 (NAGATAKI SHOJI)

中京大学・国際教養学部・教授

研究者番号：40288436

研究成果の概要 (和文) : 本研究の目的は、現象学の哲学的な思考と認知科学の具体的な研究との有機的な統合を図ることによって、言語の起源の問題に社会認知の理論と知覚と身体の理論から一定の見通しを与えることであった。もっとも、言語の起源を直接的な方法で明らかにすることには大きな困難が伴うことは言うまでもない。とはいえ、知覚と言語という人間の認識のふたつの領域の関連について調べることで、言語の起源への手がかりが掴めるはずである。本研究では、この目的を達成するために、ふたつの側面からアプローチをおこなった。ひとつは、近年の脳生理学の知見を視野に入れた、知覚的認識についての具体的な分析である。そこでは、知覚的認識のなかにある言語的認識への萌芽が確認された。もうひとつは、心の科学における新たな方法論の提案である。後者のアプローチでは、身体動作に現れる心的状態について言語的に把握する方法の確立を目指した。この過程で、言語と身体動作とのあいだの意味論的關係について把握した。本研究の成果を要約すれば、知覚的認識や身体動作といった人間の基礎的な認識行動が言語的認識や意味へとどのように繋がっているかを明らかにした点にある。

研究成果の概要 (英文) : The aim of this research is to shed light upon the origin of language by integrating phenomenological thoughts into cognitive science. It is a very hard task, indeed, to explicate the origin of language in a direct way. However, studies on the relationship between the two realms of human cognition, perception and language, promises to provide a clue to the origin of language. We took therefore a two-fold approach to the problem. The first is an analysis of perceptual cognition taking the recent results of brain science into account. We confirmed that primitive forms of linguistic cognition can be identified in perception. The second is an approach based on a new methodology in the science of mind, which tries to grasp the semantic relationship between bodily behaviors and language. To sum up the result of the present research, we articulated how human basic cognitions and bodily behaviors lead to linguistic cognitions and meanings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・ 哲学・倫理学

キーワード： 西洋哲学、認知現象学

1. 研究開始当初の背景

(1)デカルトの心身二元論以来、心の内部へとむかう哲学的な考察と心の外部を対象とする自然科学的な研究は、実質的に交わることのない道を進んできた。その心身二元論の残した哲学上の難問である心身問題には、その是非は問わないまでも、行動主義や機能主義、物理主義といった立場から様々な解決策が提案されてきた。フッサールの「志向性の理論」やメルロ＝ポンティの「現象学的身体論」なども、この難問に対して解答の一部を与えたと見なすことができる。一方、20世紀後半になって自然科学はついに心の内部へと探求の眼を向け始めた。それが、自然科学中心の学際的な研究分野としての認知科学の勃興である。人間の心の内部のメカニズムは早晚白日のもとに晒されるだろうという期待は、認知科学の主役を担った人工知能研究の盛衰と軌を一にした。やがて、20世紀末の認知科学においては、計算主義や記号主義の行き詰まりから、人間のような心や認識形態が創発するためには環境世界と関わる主体的媒体である身体が不可欠であるという観点が浮上してきた。この観点が認知科学における今日のロボティクスの興隆に繋がっている。自然科学的な手法でいわばデカルト的な道に沿って心を探求してきた認知科学も、メルロ＝ポンティがデカルト主義を脱するために研究対象の主役を身体に据えたのと同じように、その行き詰まりから身体へと眼を転じたのである。メルロ＝ポンティの現象学とその周辺を専門領域のひとつとしてきた申請者の研究計画は、こうした状況に鑑みて構想された。その全体構想を一言で述べるなら、哲学とくに現象学と認知科学の諸分野（とりわけ、身体に着目して人間の認識と行動の特異性を解明していこうとする身体性認知科学）との有機的な統合である。換言すれば、心の創発にとって不可欠な身体という共通項を軸に、現象学の哲学的思索と認知科学の自然科学的探求との統合——本研究の題目に含まれる「認知現象学」はこの統合を表現している——を企図していた。

(2)哲学とりわけ現象学と認知科学を統合しようとする試みの先達としては、F・J・ヴァレラをあげることができる。彼はメルロ＝ポンティを自らの研究の先駆とみなし、科学

研究は一人称的な経験についての具体的な記述によって補完されなければならないと考えていた。また、より新しいものでは、認知科学の哲学から現象学的思考へと裾野を広げるA・クラーク、現象学的身体論と認知科学を背景として技術の哲学を構築するD・アイディ、現象学的知覚論と認知科学の影響を受けつつ動的知覚論を展開するA・ノエ、認知科学の具体的な成果を現象学的身体論のなかに取り込もうとするS・ギャラガーなどを挙げるができる。国内の現象学研究において認知科学やそれに関係する分野を具体的に踏まえたうえで研究を展開しているものとしては、村田純一、門脇俊介、中村雅之、長滝祥司などを挙げるができる。また、認知科学のロボティクスの分野で現象学を取り込む特徴的な研究者としては、小嶋秀樹や谷淳を挙げるができる。

(3)本研究の主題となる認知現象学の基本構想は、科学研究費補助金（基盤研究(C)一般、平成15年度～平成17年度）によって遂行された「身体のアルケオロジーについての現象学的・認知科学的研究」において具体的なかたちで着手されている。この研究の目的は身体を基軸として現象学的研究と認知科学とを統合し、現代的な文脈で身体概念を再構築することであった。その成果は、長滝祥司（編著）『現象学と二十一世紀の知』や長滝祥司「身体の現象学を再構築する」において発表されている。だが、身体に焦点をあてたこの研究が進むに連れ、他者や言語といったテーマへと探求の裾野が必然的に広がることとなった。なぜなら、われわれが身体を通じて交流するのは環境世界だけではなく、そこに登場する他者やその身体だからである。加えて、こうした交流において決定的な役割を果たすのが、言語に他ならないからである。以上の流れをうけて、本研究は身体や知覚の次元と言語のもつ社会認知的次元との関係を解明すること、であった。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、現象学の哲学的な思考と認知科学の具体的な研究との有機的な統合を図ることによって、言語の起源の問題に社会認知の理論と身体論から解答を与えることであった。具体的には、認知科学の研究を

現象学の理論刷新の糧としつつ、新たに構築した理論をその実験パラダイムの方向づけに応用するという手法をとることで、両者の研究を互いに深化することを目的としていた。

(2) 本研究では、身体を基軸に据えて現象学と認知科学を統合しようとするこれまでの研究を土台としそれを展開することが目指された。それは、身体と事物・環境世界という二項関係に着目してきた研究から、私(の身体)と他者(の身体)、および事物・環境世界という三項関係にまで分析を展開させることでもある。申請者の予測では、この三項的な関係は言語獲得や思考のレベルへと人間の認識をステップ・アップさせる鍵であった。以上を踏まえたくて本研究の目的を端的に要約すると、人間の認識が身体の水準から言語の水準へ、あるいは知覚の水準から思考の水準へと展開していく際のメカニズムについての基礎理論を構築することであった。

3. 研究の方法

(1) 本研究と関係する国内外にみられる研究はどれも主として、身体による知覚や行為、身体と環境世界との関わりといった基礎的な認識や他者の心に焦点をあてている。つまり、一言でいうなら、身体を基軸として現象学と認知科学との統合を企てたものといえる。そうした研究のなかで、言語を主題化した数少ない例外としては、A・クラーク("Magic Words", In Carruthers, P., ed., Language and thought, Cambridge University Press, pp. 162-183, 1998.)がある。自動化された知覚あるいは表象を伴わない低次認識と鋭く対置する高次認識の問題を明確に意識したクラークは、高次認識にとって表象や言語の担う役割を重視する。彼は、前者と後者とを地続きのものと考え、そこに身体と認識と思考や理性を担う言語との密接な関係を見て取っている。これは、かつて言語的認識を身体的認識の拡張として考察しようとしていたメルロ＝ポンティの構想を部分的に具体化するものと捉えることが可能である。本研究は、メルロ＝ポンティやクラークのこうした構想を引き継ぎ、心の哲学、認知意味論、トマセロの言語論や間主観性の理論、およびそれに関係する進化心理学や発達心理学などを交えながら、現象学を理論的な軸として拡張するという方法論をとった。また、以上の研究を遂行するにあたって、文献研究にとどまらず、認知科学を構成する分野との実質的な協働作業を遂行するところに本研究の方法上の大きな特色があった。

(2) 本研究のもうひとつの方法論上の特質は、研究目的の性格上、哲学以外の分野との実質的な協力関係によって成果をあげるというものであった。そこで、認知科学の主要な分野である認知ロボティクスの研究者である小嶋氏のラボとの協力関係を築き研究を遂行することとした。認知ロボティクスは、身体性ということのでつぎのふたつを強く意識しつつ研究を展開してきた。(ア)身体と制約/パースペクティブ：身体あるいは第一人称的なパースペクティブから環境を捉えることで、知能主体(人間あるいはロボット)は環境の一部分だけを知覚する。この「情報の部分性」は、人間知能(あるいは自然知能)のなりたちを考える上で重要な要因である。限られていた情報から、環境への最大適応を図るのが知能だからである。(イ)身体と同型対応：システム(ロボット)と人間のコミュニケーションを考えた場合、人間からみてシステム(ロボット)が「何をしようとしているのか」「何をどう感じているのか」などを推測するには、結局、目にみえるシステムの行為(表情・発話・運動など)を手掛かりにするしかない。このとき、システムが人間と同じように環境を知覚し、環境にたいして行為するための身体を備えているならば、人間からみて、このような推測がしやすい。こうした知見は、現象学の一人称的観点からの研究と認知科学の三人称的観点からの研究のあいだにあるギャップを埋める——つまり、両者の有機的統合という本研究の大枠での課題——手掛かりとなった。

4. 研究成果

(1) 2007年度の主たる研究計画は、a. 「現象学における他者論、間主観性の理論を言語発生という観点から再検討すること」と b. 「言語発生の社会認知的基盤を認知科学的観点から明らかにすること」であった。他者問題を扱った現象学的議論としては、フッサールの「間主観性」や「感情移入」、メルロ＝ポンティの「間身体性」といった概念などがあるが、どれも一人称の私秘性を突き崩すには至ってはいないと見なされてきた。そこで本研究では特に、意識の哲学の一人称的観点からの分析と認知科学の三人称的観点からの研究のあいだにあるギャップを意識しつつ検討をおこなった。ここから得られたのは、意識の哲学から身体や他者へと関心を移行させていった展開期の現象学の二人称的観点からの分析を心理学の実験的研究の現場へと組み込むことによって、言語発生やその前段階である感情の発生を科学的に捉えることが可能であるという見通しである。それには、実験研究におけるターミノロジーを現象学的知見を踏まえて再構築する必要がある。以上について、研究発表(感情はいか

なる意味で身体に還元可能か、日本科学哲学会第40回大会、2007)と共著書(感情とクオリアの謎)において展開してある。次にb.についてであるが、哲学が他者問題を一種のアポリアとして捉える方向にある一方で、心の理論や社会的認知をめぐる認知科学の最新の実証研究は、心的状態についての三人称的知識がこれまで考えられてきたほど狭くはないということを示唆している。*Human Studies* 掲載の論文“Phenomenology and the Third Generation of Cognitive Science: Towards a Cognitive Phenomenology of the Body”は、言語発生の社会認知的基盤について、現象学と発達心理学や霊長類学といった認知科学の知見を踏まえながら検討している。社会認知的基盤を理解するばあい、三人称的観点だけでなく二人称的観点も問題になるが、後者を認知科学の客観的な成果のなかにいかに組み込んでいくかということがもっとも重要な問題になっている。うへの論文をさらに展開して、こうした問題に踏み込むことが今後の課題として浮き彫りになった。

(2)2008年度の主たる研究計画も、昨年度と同様であったが、その土台となる問題として認知科学の三人称的研究と哲学的・現象学的研究の統合を特に意識して研究を進めた。他者を扱った現象学的議論としては、現象学の「間主観性」や「感情移入」、「間身体性」といった概念などがあるが、どれも一人称の私秘性を突き崩すには至ってはいないと見なされてきた。去年は、言語発生の社会認知的基盤に関する基礎的研究を、現象学と発達心理学や霊長類学といった認知科学の知見を踏まえながら行った。本年度はこれを受け継ぐ形で研究を遂行した。社会認知的基盤を理解するばあい、三人称的観点だけでなく二人称的観点も問題になるが、後者を認知科学の客観的な成果のなかにいかに組み込んでいくかということがもっとも重要な問題になっている。そこで本年度は特に、意識の現象学の一人称的観点からの分析と認知科学の三人称的観点からの具体的研究のあいだにあるギャップを意識しつつ検討をおこなった。これに関しては、論文“Mind, embodiment, and second person perspective”および、「心を科学する方法について」で論じた。とくにそのなかで、言語報告と心的内容との相関だけでなく、二人称的な観点からの他者の心的内容についての報告の精度を問題とした。『心/脳の哲学』所収の論文では、大脳生理学の研究を視野に入れつつ、知覚的認識を自動化されたレベルと意識的なレベルにわけ、後者には言語による知覚の意味論的な固定という側面があることを明らかにした。

(3)本研究計画の最終年度にあたる2009年度では、現象学の身体論的言語論と認知意味論に欠けていた言語の発生に関する他者の関与という視点について探究を進める計画であった。また、特に言語発生を念頭に置きつつこれまで遂行してきた研究を総括し、現象学的研究と認知科学的研究を統合的に理解する方向で研究を行った。以上によって、言語発生のメカニズムに一定の見通しを与えることができたが、一方でこのメカニズムは身体的知覚の次元から言語的な次元へと抽象化される人間の認識の展開にも関わっていた。また、そのメカニズムに関連して、論文On the Methodology of the Science of Mindで、他者(被験者)の具体的な身体動作についての言語的記述(二人称的観点からの記述)と、脳の三人称的、客観的状態、被験者の一人称的報告との相関を明らかにするような実験パラダイムを提案した。ここで身体動作についての観察記述を二人称的とするのは、これが外部から観察されるものであるとはいえ、脳状態のような非人格的な事物を対象とするのではなく、人格を備えたコミュニケーション可能な他者を対象としているからである。この実験パラダイムの提案は、これまでにない方法論的な展望を認知科学にあたえるきっかけとなりうる(本研究の成果を国際学会”4th. International Nonlinear Science conference”において発表し、心理学者を中心に多くの注目を集めた)。一方、哲学的には、認知科学の成果の理論的な方向付けを行うことによって、現象学的観点から満足のいく回答を与えることのできない間主観性の問題に対する指針が得られた。言語発生のさらなる探究については、身体動作についての一人称的記述と二人称的記述(他者の視点からの記述)を現象学的観点から分析することでさらに展開されることが予想されるが、今後の課題とする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①長滝祥司、あるアンチ・ヒーローの物語をめぐって、日本病跡学会誌、査読無、78巻、2009、16-25

②長滝祥司、心を科学する方法について、大航海、査読無、Vol. 69、2009、43-51

③SHOJI NAGATAKI and SATORU HIROSE, Phenomenology and the Third Generation of Cognitive Science: Towards a Cognitive Phenomenology of the Body, HUMAN STUDIES, 査読有、vol. 30, 2007, 212-232

[学会発表] (計3件)

① SHOJI NAGATAKI, On the Methodology of the Science of Mind, 4th. International Nonlinear Science conference, 2010. 3. 16, Università di Palermo (イタリア)

② SHOJI NAGATAKI, Mind, embodiment, and second-person perspective, Ver une nouvelle philosophie du corps: Centenaire de la naissance de Maurice Merleau-Ponty, 2008. 11. 23, tokyo

③ 長滝祥司、感情はいかなる意味で身体に還元可能か、日本科学哲学会第40回大会、2007. 9. 11、中央大学多摩キャンパス

[図書] (計3件)

① 長滝祥司、他、ナカニシヤ出版、倫理学の地図、2010、289

② 長滝祥司、他、岩波書店、岩波講座哲学第5巻心／脳の哲学、2008、275

③ 長滝祥司、他、昭和堂、感情とクオリアの謎、2008、289

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長滝 祥司 (NAGATAKI SHOJI)
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：40288436

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：